

T. Middleton : *A Game at Chess* に観る 17世紀初頭のイングランド

日 浅 和 枝

(I)

中世においてカトリック修道会は「労働と祈り」を旨とした。しかし反宗教改革の時代になると、修道士が世俗社会に入って現世的事業に携わりそれを勢力拡大の為に活用する事、一般庶民の宗教的教導の為に説教・教理問答・布教などに力を入れる事などへと変容する。その状況の中で、1534年8月パリでイグナティウス・ロヨラ、フランシスコ・ザビエル等7人が「清貧」「貞潔」「聖地エルサレム巡礼」の誓願を立ててイエズス会が誕生し、1540年ローマ教皇パウロ三世により修道会として公認された。

イエズス会の主な特色は次のようなものである

- 1) 上長に対する服従：特にローマ教皇への絶対的服従義務があり、どのような犠牲も顧みずに教皇の命令に服し、イエズス会の目的達成の為に身を捨てる。
- 2) 戦闘的な集団意志：彼らはキリストを最高司令官、自らをキリストの精鋭兵士、異教の地を戦場とみなして団結する。
- 3) その為に入会希望者には健康・志操・知性・情熱など厳格な審査と選抜を行い、長期にわたる厳しい訓練を課する。
- 4) 海外布教の重視と実践：あらゆる異教の悪魔に支配される人類を救済し神の民とする為に世界の果てまで進出し布教する。

他方15世紀半ばから末にかけてのポルトガルとスペインの海外図版拡大事業において、両国はローマ教皇を巻き込んで異教世界を二分割して征服する事業を展開する。この世界制覇の争いのなかで、両国は1494年の条約により各々の支配領域を定めた。かつその侵略行為を正当化する為、両国ともに

「靈魂の救済」という崇高な目的を掲げ、その具現化がイエズス会の宣教師となった。イエズス会は上記の思想をポルトガルとスペインの世界制覇の意図の下に実践に移していくが、当然国家利害に拘束され、宣教師たちも単なるボランティア集団ではなく国家事業の一環として組織されることになった。

世界各地に派遣されたイエズス修道会宣教師たちは、布教活動や状況をローマの本部に報告する義務があった。これは本来、遠方の会員と首脳陣との絆や結束強化の為であったが、しだいに情報収集の方に比重が移る。本部は布教地の情報を収集して問題を分析しその解決策を指示するが、この情報収集は布教戦略には欠かすことの出来ない重要性を持ち、各地域の地形・実権把握者・政情・住民や社会の特質など細かく具体的な報告が必要であった(注1)。

以上のように、国家と宗教の野望が相互に相手を利用しつつ、世界征服を試みたのである。

(II)

17世紀初頭のイングランドにおける宗教的状况として、プロテスタント・アングリカン教会派であるイングランド人は、カトリック、スペイン、そしてジェスイット会(イエズス会)に強烈な反感を抱いていた。歴史的に、1534年ヘンリー八世は離婚問題でローマ教皇と絶縁し、アングリカン教会を創設してその首長となった。同じ年の1534年にスペイン人イグナティウス・ロヨラ(1491-1556)はジェスイット修道会を創設した。その当初の目的はイスラム教ほかの異教徒の改宗であったが、やがて反宗教改革の中心的機関となり、「カトリック教の戦士」という役割を担った。策略的ジェスイット派は自分たちの会派を、絶対体制に組織してあらゆる王国を自由に支配するかのごとく Grand-Monarchy とも呼んでいた。

1570年、時の教皇はエリザベス一世を破門し、彼女の臣下であるカトリック信者が女王への忠誠の誓いを破っても精神的罪は免除されるとした。1588年スペインのアルマダ艦隊との戦いでイングランドは勝利を収めたものの、1605年の議事堂爆破とジェームズ一世とその議員の殺害を企てたカトリック教徒の陰謀いわゆるガイ・フォークス事件が起こり、この件にジェスイットの神父ヘンリー・ガーネットが絡んでいた。また1606年と1607年の二回、時の教皇はイングランド人カトリック教徒がジェームズ一世に忠誠の誓いをす

ることを禁じた。

1613年ジェームズ一世の娘エリザベスは、ドイツ帝国内ライン川沿岸の選帝公でプロテスタントのフレデリック五世と結婚したが、フレデリック五世はスペインに支持されている神聖ローマ帝国皇帝フェルディナンド一世と対立し、苦境に立たされる。他方、ジェームズ一世の息子チャールズは、フランスのルイ十三世の妹ヘンリエッタ・マリアとの結婚の可能性があったが、1613年駐英スペイン大使となったゴンドマー公は、ジェームズ一世が義理の息子フレデリック五世を援助することでドイツ・プロテスタントに味方することに反対し、莫大な持参金をもたらすスペイン王女ドンナ・マリアとの結婚を勧めた。ジェームズ一世は、チャールズとスペイン王女の結婚によりドイツのフレデリック五世夫妻援助に対するスペインの同意を得ようとする一方、スペインはカトリックの強烈な支持者として、ジェームズ一世にドイツ問題から手を引かせ且つイングランドのなかにカトリックの特権を拡大させようとした。

ゴンドマー公は1622年の帰国の際、王子チャールズにゴンドマー公が要求したら何時であれスペインを訪問する事を約束させ、両王家の結婚とチャールズのカトリック改宗さえ考えるに至っていた。1623年初めチャールズと友人バッキンガム公は秘かにマドリッドへ出発し、国民を仰天させる。二人はスペイン宮廷で大歓迎を受け且つ結婚の約束が結ばれるが、しかし二人にとって自分たちの立場が必ずしも安全とは感じられず、また結婚の条件は全く受け入れがたいものであることが明白になり、二人は帰国する。又フレデリック五世とドイツ・プロテスタントへの支持も得られず、バッキンガム公はスペイン支持から反スペインに変節し、チャールズの強い意向もあって、スペインとの結婚は無効となり、フランスとの結婚へと向かうことになる。

こうした複雑多岐にわたる政治的・宗教的状况の中で、イングランド・プロテスタントは、スペインとの結婚問題の為に長い間沈黙を強いられていたが、それが無効となった今アルマダ艦隊との戦いやガイ・フォークス事件の記憶と共に、カトリックとジェスイットへの嫌悪が噴き出した。チャールズ王子の未来のフランス人花嫁もカトリックであったが、スペインとジェスイットの固い結び付きはジェスイットへの強烈な反感を生み、反カトリック、反スペイン、反ジェスイットをテーマとする詩や小冊子が無数に出版され、教皇をキリストの敵 Antichrist、スペインを彼の手先、ジェスイットを悪魔の

偽善者として誇張し、ドイツ・プロテスタント支持を鮮明にした。イングランド国民にとって、カトリック、スペイン、ジェズイット修道会は恐怖と共に嫌悪の対象であった。

Jesuit とその派生語の意味を *O.E.D.* (1961) でみると次のようである、Jesuit (sb.) は「この会派の隠れた力と詭弁的信条ゆえに英語、仏語その他の言語で『憎むべきもの』の意味を持つに至る」とあり、「1. ジェズイット会員」の次に「2. 真意を隠す人；曖昧なことを言う人」の意味があり、初出は1640年。

Jesuited (a.) は「ジェズイットにされた、又は、ジェズイットになる；ジェズイットに影響された、又は、ジェズイットにより墮落させられた」、初出は1601年。

Jesuitical (a.) は「2. ジェズイットに帰せられる性格を持った；人をだます、真意を隠す；言い紛らし、曖昧なことを言う、または、真実を意中保留する」、初出1613年。

Jesuitically (adv.) は「ジェズイットのやり方で；言い紛らしや意中保留で；人を欺くずるいやり方で」、初出1624年。

そして通例、単語は書物に書かれる数年前から、話し言葉で流通しているものである。

(III)

ミドルトンの *A Game at Chess* は1624年6月に認可を受け、8月に初演された。白と黒のチェスの駒が勝負をし白が勝利する、というものだが、ここには16世紀から17世紀にかけてのイングランドの道徳、宗教、政治が光と影となって交錯している。特に中世の道徳劇にみられる善と悪、悪への誘惑と良心の呵責という永遠の問題は、必然的に宗教と関係を持つ。又、「チェス」というゲームは、コマの白と黒が善と悪を意味する点で道徳的かつ寓意的な意味を持ち、またこれは王侯貴族の遊びで、且つコマが王、王妃、司祭、騎士、城、と各々の歩であるため政治的解釈も可能になる。この作品をそのテーマごとに追い、この時代の社会的状況が反映されている様子を把握する。

Prologue は例によって観客への挨拶で「徳の敵に対し checkmate [王手] が掛けられるが、このゲームの上演が皆様の check [叱責] (注2) を避けられ

れば幸いである」という10行の後、78行に亘る Induction があり、イグナティウス・ロヨラが登場しその足元には「過ち Error」が眠っている。ロヨラは、イングランドに自分の意図と教団を拡大すべき弟子たちが見当たらないことを嘆く。イングランドにおける最初のイエズイット伝道は、この作品の初演より80年以上前の1542年であり、初演の1624年にロンドンに居るイエズイットの数は255名のみだった。彼の嘆きは続き「ここでは大いなる光を発する真実と善はまだ暴力で犯されておらず」、かつ「イエズイット派がここに居ないなら彼らの君主体制はまだ未完成なのだ」は、スペインとイエズイットが抱く世界制覇の野望と司祭の邪淫を現す。次に彼は Error に Father of Supererogation (36) と呼び掛ける。Supererogation は「神の命令以上に行われた善行は、他の人々の過失を償う為に使うことが出来る」というカトリックの教理であるが、カトリックと「過ち・正道からの逸脱」との結びつきは当時万人の周知するところであった。

やがて、Black House と White House の全コマが板上に並ぶ。その中の Black Queen's Pawn (以後 BQP と表記) と Black Bishop's Pawn (以後 BBP) はイエズイットであるが、ロヨラは Pawn のような卑しい者は自分の弟子に値しないと不平を言う。さらに「わしが Black Bishop (以後 BB) なら女王に恋をささやいて彼女の胸を踊らせてやるのに」(Bishop の位置は Queen の隣) は性欲が黒コマの動きの原動力であり、それはカトリック教、教皇、司祭やイエズイットと直結していた。また彼は「rule [支配する] のであって、[規則] には従わない (71)」し、「世界を一人で支配するのは素晴らしいことだ」と独裁の野望を示す。そしてこのゲームでは、「城 Rook」は「公爵 Duke」と変更されて (55) 各々の王に寵愛されている。

スペインとイエズイットが抱く世界制覇と絶対君主制の確立、カトリック司祭やイエズイットの邪淫と正道からの逸脱等、以上のような事々はイエズイット派の言い抜けと誤魔化し、偏在性、無慈悲な執念深さなどと共に当時の人々の中に広く流布しており、なんら説明の必要もない事柄であった。

(IV)

作品の中で最も重要なプロットのひとつは、BBP が White Queen's Pawn (以後 WQP) に抱く邪淫である。BQP は彼の願望が成就する方向へと WQP を誘導していくが、その援助は彼の為と見せ掛けて実は BQP 自身の欲望の

為である。このプロットでは ジェスイット会員の誓い「清貧」「貞潔」「忠順」が悪用される。ジェスイットの BQP は WQP をアングリカン信者という異教徒として哀れみ、そのような信仰は力と魂を奪う敵だと断じ、自己の信仰に固執する WQP に、登場してきた BBP を称えて言う

so will he cherish
All his young tractable sweet obedient daughters
E'en in his bosom, in his own dear bosom.
(I i 38-40)

「若い従順な娘を胸の中で慈しむ」には宗教的意味と同時に猥雑な意味も当然含まれており、BBP は「あの聖域に近づく前に」彼女の目、唇、頬など肉体の美しさを傍白で誉めそやす。彼はその誘惑の中で、カトリックの司祭に対する「秘密告白 auricular confession」は絶対に外部に漏れることは無いと断言する。これはカトリックが「反逆」と「性欲度」を探り出す手段であり、「性欲度」は絶対君主制確立の為の特別重要な道具で、一旦それが分かれば (once ours) それを我々の計画 (our designs) の為に (I i 112-5) 徹底的に利用出来る重要な情報であった。プロテスタントの拡大を阻止しようとする反宗教改革の先頭に立って戦うジェスイットが、「宗教」という仮面の下に抱く世界制覇の野望達成の為の腐敗した手段であり、Jesuitical gamester (II ii 251) とも呼ばれている。かつここではその仮面の下に隠れた個人的な欲望を満たす道具としてジェスイット司祭の悪魔的偽善の象徴となる。

しかしこの手段は WQP の完璧に純粋な信仰心の前に失敗し、BBP は次の手段として精神的父に導かれるべきとする「教会での女性の義務 daughter's duty」(I i 187) を教える為に彼女に「忠順」に関する冊子を渡す。そこに書かれた「無限の忠順 Boundless obedience」(I i 38) を宗教的にのみ解釈する WQP に、彼は俗界も含めた絶対的服従として「愛のキス」を求め、拒否されると「不服従」として諫め、さらには暴力に及ぼうとした時、奥の物音に怯む。それを機に WQP はこの悪事を暴露すると誓って去る

I will discover thee, arch-hypocrite,
To all the kindreds of earth.
(II i 147-8)

この好色の罪を犯す者は黒陣営の中で彼一人ではないにしろ皆上手く対処しているのであり、彼のように愚かな行動によってその悪事を暴露されることはジェスイット派の、そして黒一族の絶対君主制確立 absolute monarchy への脅威であり、彼の主人 Black Bishop (以後 BP) は、10日早い日付けの手紙を残して BBP を旅立たせるという欺瞞を行う。

両陣営が居並ぶなかで WQP は BBP の汚れた情欲を暴露し、黒陣営の反論を「狡猾と言ひ紛らし Craft and equivocation」(II ii 182) と非難する。Equivocation はジェスイット会主義 (その教義・慣行) の一つであり、カトリックの「意中保留 mental reservation」の一種で、「曖昧表現の使用」のこと。「意中保留」とは「第四戒 [偽証してはならない] と正しい守秘義務の間に対立が起こる場合、そのジレンマから当人を救うための理論: あるいは黙秘が肯定と受け取られる場合、曖昧な言葉を用いること」。この equivocation は、ガイ・フォークス事件に共謀したとの告発に対しジェスイット神父ヘンリー・ガーネットが弁護の為に使ったものとして、イングランド国民にはよく知られていた。

しかし白陣営は、偽手紙を正しい証拠とみなして WQP を黒陣営に渡すが、White Knight と White Duke によって手紙は偽物だと証明され、WQP は放免される。しかし、結婚への期待も捨て切れない WQP に、BQP は豪華な衣装をまとう紳士に変装した BBP を魔法の鏡に映して見せ、彼は地位・人格共に比類ない完璧な紳士で貴女は彼と結婚する運命にある、と説明する (III iii)。WQP は彼との結婚に同意するが、性急に結婚の喜びを要求する紳士を非難して、結婚証明書が必要だと主張する。「結婚」にひるむ BBP を BQP が説得するその論理は、ジェスイット派の「貞潔」の誓いは結婚生活を無効とする力を持つゆえに彼は結婚は出来ない、しかし「婚約」なら会派への誓いを破る汚点も付かずなんら問題は無い、しかも彼女を手に入れられるのだ。そして「婚約」は equivocation が許される例である。BQP は、このように苦勞するのも自分の欲望の為だと傍白し、WQP の身代わり花嫁となって BBP と WQP 両方を欺く (IV iii)。この裏切りを知らずに WQP は、あの立派な紳士は自分の愛を試した慎み深い人だと解釈してはまだ処女であることを喜ぶ一方、司祭の服に戻った BBP は、自分こそ昨夜共寝をした相手だと暴露する。当惑する二人に BQP は事実を暴露し、そして悪人二人は White Queen と White Bishop's Pawn に捕らわれ、WQP は「独身生活 single life」を守ると誓うが (V ii)、これはアングリカンの精神を象徴しているとされた。

WQP を中心とするプロットは、宗教の教理を悪用して女性を陵辱する司祭の、天使を装った悪魔の所業を示している。

道徳と宗教が絡む他のプロットは、Black Knight's Pawn (以後 BKP) の件である。彼はかつて White Bishop's Pawn (以後 WBP) を去勢してしまい、今その蛮行を深く後悔し (I i)、罪の許しを求めている。その懺悔を聞いた BBP は負担記録表 tax-register に従い金銭で得られる許しの制度を教える (IV i)。Tax Poenitentiaria (book of general pardons of all prices) 即ち悔罪負担金表には、様々な罪の許しを得る為の負担金額が記録され、「謀殺は 3 ポンド 4 シリング 6 ペンス」「密通は 5 ペンス」等でその罪は許される。しかし「去勢」の前例は皆無でその価格も記録に無く、絶望した BKP は WBP を殺害することで罪の許しを買い取ることにし (IV ii)、WBP を襲った瞬間 WQP に捕われる (V iii)。

WQP の宗教と道徳に関するプロットと並ぶ重要なプロットは政治に関わる Black Knight (BK) の世界制覇計画で、彼は登場するや (I i) 「世界的君主政体 universal monarchy」(243) 確立の計画がキリスト教の諸王国から集めている多大な情報により順調に進んでいることを喜び、自分の貢献度を誇るがそれは「愛想の良い狡猾さ pleasant subtlety」、「魔術で魅了する丁重さ bewitching courtship」(I i 258) を駆使して悪事を楽しみながら実行する。彼は、BBP が女を前にすると政治的支配権もさらに神聖な至高の権利である教会支配権も忘れてしまうと嘆き、BBP の婦女暴行が世間に暴露されたら世界制覇の仕事が逆戻りしてしまう、と BBP を叱責する (II i)。

次に彼は、黒側から白陣営に変節し黒側を罵っている Fat Bishop (FB) を再び黒側に寝返らせる為、「蛇の如き狡猾の傑作 masterpiece of serpent subtlety」(II ii 58) を考え出す。即ち白側での病院長という地位に不満で更なる昇進を切望する FB に、ある枢機卿からの「空席を与える」という偽手紙を渡す。FB はこの「愛想の良い狡猾さ」に嬉々として騙され、全コマが板上に並ぶ中で黒陣営への転向を公表する (III i)。しかし BK はこれに満足せず、当面は彼に諂うがやがては彼を危険な仕事につけて破滅させる計画で、それは White Queen に欲望を抱く Black King の為に WQ を捕えるよう FB を唆し、ふたたび彼の計画に乗った FB は WQ を襲うが White Bishop に捕われ、BK の計画は成功する。

同様に、BK による高職の誘惑に負けて変節するのが White King's Pawn

(WKP) で、彼は自ら「衣は白いが心は黒い」と認め、BK の計画援助の為白側の情報を流し、自己の権力を使って黒に不利な計画を阻止している (I i)。ここでも BK は表面上彼を高く評価して枢機卿の staff [杖] と赤い帽子を約束しつつ、「杖」とは背徳を罰する [棍棒] だと傍白し、両陣営の並ぶ中で彼の白い上着を剥ぎ取って内側は黒であることを暴露する。BK は常に致命的な毒を相手が喜んで飲むように仕組み、それを見て大笑いする。

FB と WKP 二人の身内の変節に対し、White Knight は「危険な偽善者 dangerous hypocrite」(III i 262)、「用意周到な偽善者 prepared hypocrite」(296) と叱責し、White King は臣下の変節を「例の無い背徳の腐敗者 rottenness Of thy alone corruption」(104) と非難し、FB を「偽善の毒 poison of hypocrite で太った忘恩の塊」(IV v 34) として二人を見放す。

BK は「世界の所有」という大事業の為に、その他の悪事、賄賂で役人たちを押え、信仰の自由を求める者や虚しい昇進を願う者達から金品を巻き上げ (III i 99, 109-12)、宮廷の夫人達を猥談で誘惑し、貴族との結婚を願う女達から金を受け取り、教会の聖油・数珠・聖人の絵や赦免状さえ売る (IV ii 34-5, 41-3) 等、あらゆる悪事を楽しむ。彼は、人を去勢した罪に悩み許しを切望する部下の BKP を「つまらぬ生茹での悪事」に良心を痛める「吐き気を催す奴」と軽蔑する。

BK の最大の傑作は、White Knight (WK) と White Duke (WD) を罠にかけ擬餌で黒陣営へ誘き入れる計画で、二人に諂って、二人を喜ばせて愛と賛辞を得る為ならどんな道化役もやってきたし将来もやると甘言を述べ (IV iv)、二人はある計画の下に、黒陣営の娯楽、国家、威厳をぜひ見たいと応じる (IV v)。黒陣営は二人を大歓迎し、BK は黒側の節制、自制、粗食を誇るがそれでも黒側に提供出来ない物は無いと誇る一方で、白側の美食の飽食による肥満を皮肉る (V iii)。WK は黒陣営の正体を暴く計略の下に、美食以外の自己の欠点「野心」「貪欲」「性欲」を挙げる。BK は「野心」に関しては、世界制覇という黒の野心の中では白王国など単にサラダ菜を摘む庭にすぎずヨーロッパ各国を支配する計画を述べ、また信仰、祈り、瀕死の者への慰めなどから得られる無限の財宝によりどんな「貪欲」も満足させられるし、「性欲」など無邪気なつまらぬ悪であり尼僧院の廢墟の池から6000もの赤子の頭蓋骨が出てきて母親-処女の尼僧たちを当惑させたという驚くべき話をする。

最後に WK が自分の最も内奥の毒「偽善 dissemblance」を挙げると、BK

はそれこそ「地上唯一の国家の徳 only prime state-value upon earth」(V iii 150)、「貴重な宝石 jewel of that precious value」(153)、「王達の心を開かせ我々の心に錠を下ろす道具」であり、黒王国が実行してきたことは常に「偽善」なのだと言う。この実体の暴露 discovery により WK は Black King を王手詰めにして捕らえ、そして White King はすでに捕らわれて袋に入っている FB や BBP に加えて黒陣営を次々に袋に入れる。

(V)

この作品の上演を観た観客は、様々な政治的、社会的状況を透かし見ることが出来た。Induction で既に、スペイン人でありジェスイット派の創立者イグナティウス・ロヨラの登場とその台詞で、スペインの世界制覇の野望、カトリックと諸悪の結びつき、司祭やジェスイット達の好色などが言及されており、White House はイングランド、Black House はスペインを意味していることは明白だった。

人物の体現では、Black Knight が1613年8月から1622年6月までスペインの駐英大使だったゴンドマー伯爵 (Conde de Gondomar 1567-1621) であることは自明のことで、この作品は「ゴンドマーの芝居」とも呼ばれていた。まず、ゴンドマー公が痔ろうを病んでいたことは、「液体の漏れる尻 leaking bottom」(II i 173)、「ヨーロッパの化膿した潰瘍 fistula of Europe」(II ii 46)、「悪臭を放つ穴 foul flow」(IV ii 7)、彼専用の座部のない椅子 (V i 冒頭ト書き)、病んで臭い肛門 (V iii 209) 等、身体的な描写の反復がある。

またゴンドマー伯が、王子チャールズとバッキンガム公をマドリッドに招き、チャールズとスペイン王女の結婚によりイングランドにカトリックとスペイン勢力の拡大を図る策略は、BK が繰り返す universal monarchy (I i 243)、hierarchy, divine principality (251), great monarchal business (II i 165), possession of the world (III i 84) などに明白である。彼はイングランド滞在中に、害虫バツタ (ジェスイット派) を撒き散らして人々を改宗させようとし、スペインの政策に口出しする者を投獄し、カトリックの説教を許す一方その反対者を弾圧する等、軍事力より知力と策略を駆使した人物であった。彼は作品の中で、fistula of Europe (II ii 46)、The glitteringest serpent (IV iv 10), the mightiest Machiavel-politician (V iii 204) と呼ばれるが、「蛇」は悪魔とスペインを現すイメージとしてイングランド人に嫌悪されており、ゴ

ンドマー伯は1620年代のロンドンではゴシップの種であった。

黒から白へ、そして又黒へと変節するサヴォイ病院長 Fat Bishop はスペインのスパラト大司教マーク・アントニオ・デ・ドミニ (Marc Antonio De Dominis 1566-1624) とされ、彼の担当するベッドの long Acre (II ii 36) は [長い列; Long Acre] の地口をなし、ロング・エイカーはセント・マーティンズ・レーンからドルーリー・レーンまでの通りの名前で、近くのコヴェント・ガーデンと共に悪評高い場所であった。また彼はサヴォイ近くのテムズ川へ出る watergate [水門:vulva] (II ii 44) で売春の斡旋をしていたとされる。サヴォイ病院は、サヴォイ城が「洗礼者ヨハネ病院」として寄贈されたもので、その構内は法律の及ばない聖域であった為にかがわしい者達が入りし、そのチャペルは不法結婚に使われていた。最後に FB は捕われて袋に入れられるが、その肥満の為「楽に横たわる room」(V iii 92) を要求する。Room [余地:Rome] の地口は、ドミニが背教者としてローマで宗教裁判にかけられサン・アンジェロ城に投獄されたことへの言及である。

登場は少ないが、Black Duke はスペインのフィリップ四世の愛人オリヴァレ公爵 (Conde-Duque de Olivares 1587-1645) とされ、「オリーブ色をしたガニミード olive-coloured Ganymede」(V iii 212) と韻を踏んで暗示されている。

白服の下に黒服を着て BK (ゴンドマー伯) の野望を助けイングランドを裏切った White King's Pawn はミドルセックス伯ライオネル・クランフォードで、彼はジェームズ一世の大蔵卿であったが、バッキンガム公がスペインとの戦争を主張した時その巨額な戦費ゆえに反対した為、スペイン支持者の裏切り者として告発された。

White Bishop はカンタベリー大司教ジョージ・アボット (1562-1633) で、彼はピューリタン賛同者であり、カトリックに、そしてイングランドとスペインの結婚に強力に反対していた。BB は部下の BBP の悪事を指摘されて怒り、WB を「酒も飲まない誠実さ sober sincerity」、「偽善者 hypocrite」(II ii 153-4) と罵り、ピューリタンとしてアボットを嘲っている。

BBP の悪計に落ちた WQP を助ける White Knight と White Duke は各々王子チャールズとバッキンガム公で、二人はゴンドマー伯の招きでスペインへ行くが結局スペイン王女との結婚は放棄する。作品では、二人にとって正義の為とはいえ一度でも偽ることは苦痛であるのだが (IV vi)、BK の誘いに応じたかの如く偽ってスペインの正体を暴露して勝利する。

White King はジェームス一世で、ジェスイット (BBP) の偽善と悪魔の関連「天使の姿をした悪魔」を鋭く非難し、スペインを支持する大蔵卿ミドルセックス (WKP) の背信を前例のない背徳の腐敗と言ひ、「いかに恩寵を与えていたにしろ欺瞞を見つけたらすぐに切り捨てる」と断罪する (III i)。それを称えるカンタベリー大司教アボット (WB) の「地上における神の代理人 heaven's substitute」(276) は、ジェームス一世の信奉した「王権神授説」を現している。

その他作品で言及されている人名・地名に関して、「負担記録」(IV ii) に記載されている「異教徒の王 (アンリ四世) を毒剣で殺す心付けとして5,000ダカット」受け取ったのはフランソワ・ラヴェラックであり、1610年のこの暗殺はジェスイットによって吹き込まれたと考えられていた。また「ロペズ医師は白王国の処女王毒殺に対して20,000ダカット受け取る約束をした」が、ロペズはエリザベス一世の主治医であったポルトガル人で、1594年に処刑された。後にこの金額が同じく世界制覇を目論むポルトガルのリスボンの女子修道院に寄贈されたが、これはエリザベス一世に対するロペズの計画とカトリックを結びつける。またこの女子修道院との関連で「アントワープ」の修道院への言及があり、アントワープはジェスイットのイングランド派遣伝道者達が養成・訓練されていたカトリックの都市であった。

BK が集めた情報の中にある「ホワイトフライアーズ」は、フリート通りとテムズ川の間で1697年迄亡命者、負債者、娼婦等の聖域であったが、17世紀にはこの地がカトリック、尼僧院、売春との係わりで言及されていた。

WK (チャールズ王子) と WD (バッキンガム公) が黒陣営に到着した時 (V i)、黒王国は二人を大歓迎する。ラテン語による歓迎は黒王国全体のみならず、「ジェスイットの修道院と神聖な育成の場 The colleges and sanctimonious seed-plots」即ちジェスイット会派全体の意向である。その歓迎の歌にある「祭壇から炎が高く立ち上り、ろうそくの火をともし」、「真鍮の像は不思議な力によって生命を得て動き出す」(21) は、キリストの敵又はその祭司達は天から火を降ってこさせ、又獣の像に生命を吹き込む、とプロテスタントに信じられていたことを示し、又「火が立ち上る」は、ジェスイット創設者イグナティウス自身も言うように (Induction 35)、「イグナ」がラテン語で「火」を意味することとも関連して、ジェスイットの扇動、教唆への言及とも解釈された。「像が動き踊る」のようなショーはカトリックが無

学な軽信者達をカトリックに改宗させる為にとった偶像崇拜的手段だと、プロテスタントは考えていた。

(VI)

教皇パウロ五世は1609年にイエズイット会創始者ロヨラを福者 (beatus : 天福を受けた者の列に加えられる) と宣告し、グレゴリー十五世は1622年に彼を更に聖人 (saint) に列する教書を出したが、その2年後1624年にミドルトンのこの作品が上演されている。イエズイット修道僧を中心とするカトリック勢力の拡大と、強大な力を持っていたスペインとの政治的諸問題の中で、作者ミドルトンは、教皇をキリストの敵 Antichrist、スペインをその手先、イエズイットを悪魔の偽善者とはっきり推測出来るこの作品を上演するにあたり、大きな危険に巻き込まれる恐れがあった。

例えば、この芝居は8月6日から上演されたが、スペイン大使館員ドン・カルロス・コロマは8月17日にジェームス一世宛に手紙を書き、「国王一座がひどく恥ずべき、不敬度かつ野蛮で、我が国王に対し攻撃的な喜劇を上演した廉で作者と役者を罰するよう」求め、又、8月20日付けで、作品中の Black Duke 即ち olive-coloured Ganymede と揶揄されてフィリペ四世の愛人と暗示されたオリヴァレ公その人に長い手紙を書き、幕ごとのプロットを記した上、「劇場から出てきた観客達はスペインへの反感で燃え上がり、こっそりその芝居を観にいったカトリックの人々は私に、通りに出るのは危険であり家をしっかりと警護するようにと忠告した」、「我々の最善の策は今こそ勇気と決断力を示すことである」と書いている。

ミドルトンは1624年上演のこの作品の Induction で、ロヨラの1622年の聖列について、「あれからまだ5年も経っていない」とロヨラに言わせて聖列の年をずらせることで、時事問題となることの回避を試み、さらに、これから行われるチェスのゲームは「単なる夢 dream、幻想 vision」(49-50) にすぎないと Error に言わせて、同時代の描写として解釈されるよりむしろこの芝居を思弁的なものにするによって、責任を逃れ、検閲から自己を守ることを図っている。

しかし Induction で早くもロヨラの台詞から、スペインの世界制覇の願望、イエズイットの邪念、そして Rook を Duke に変更した事等、宗教的、政治的現実がはっきりと透けて見える。そしてこの作品でもっとも重要な語は

discover であり、神聖と思われている「宗教」に包み込まれ覆われ (cover) していたものがそのカバーを剥ぎ取って (discover) みると、壮大無比の野望と腐敗が現れるのであり、この作品はその「偽善」への弾劾である。

注

1. 高橋裕史『イエズス会の世界戦略』（講談社 2006）、第二章～第四章
2. 地口は〔A:B〕の形で示した

参考文献

- Middleton, Thomas : *A Game at Chess* ed. T. H. Howard-Hill (Manchester U.P.1993) 引用はこの版による。又イングランドの状況に関してはこの版の Introduction, Notes, Appendix を参考にした。
- Moore, John R. : “Contemporary Significance of Middleton’s *A Game at Chess*” *PMLA* Vol.50 (1935)
- Wilson, E. M. and Turner, O. : “The Spanish Protest against *A Game at Chess*” *Modern Language Review* Vol. 44 (1949)
- Sargent, R. : “Theme and Structure on Middleton’s *A Game at Chess*” *Modern Language Review* Vol.66 (1971)
- Sherman, J. : “The Pawn’s Allegory in Middleton’s *A Game at Chess*” *Review of English Studies* Vol. 29 (1978)
- Howard-Hill, T. H. : “The Unique Eye-Witness Report of Middleton’s *A Game at Chess*” *Review of English Studies* Vol. 42 (1991)
- メノカル、M. R., 足立孝訳『寛容の文化：ムスリム、ユダヤ人、キリスト教徒の中世スペイン』（名古屋大学出版 2005）